

日本語教育的実践としての「インターネット・ホームページ・イーラーニング」 ー筆者の試行錯誤的経験に基づいてー

森 康眞

1. はじめにー日本語教育の中の「パソコンへの関心」

パーソナル・コンピュータ（以下；パソコン）の普及が始まったのは、1980年代と言われている。その当時、筆者は、ワープロ専用機（ワード・プロセッサ）を使用していたが、パソコンは「まだ遠くて、高価な機器」というイメージを抱いていた。1990年代に入った半ば頃から「インターネット」という言葉が聞かれるようになり、これに伴って、「電子メール」や「ワールド・ワイド・ウェブ（WWW）」なる用語も耳にするに至った。

それ以降、パソコンのハードとソフトの両面における日進月歩の開発は、ビジネス界、各種機関、学校教育という社会的レベルから個人レベルへと浸透し、パソコンの利便性が広く認められるに至った。この背景には、コンピュータ市場における「需要と供給」のバランスの中で、普及を加速する社会的要因がある一方で、一般個人に対しては、妥当な価格を提供できたという要因（低価格化）も指摘されよう。

ところで、筆者が勤務する職場（大学）でも、1999年より教職員のコンピュータ・リテラシーを高めるべく、一般的及び入門的なコンピュータの研修が始まり、ここ数年前からは、教員に対しては、E-learning（電子教育）のコンテンツ作成のためのノウ・ハウを習得する研修プログラムも開始された。筆者自身も2000年頃発表された「ワープロの生産中止」を受けて、2001年にデスク・トップ型のパソコンを初めてタイ国で購入し、その翌年には日本で「ノートパソコン」も購入して来た。以来、パソコンは、仕事上、必要不可欠なツールになっている。

こうした一連の流れの中で、筆者は、「パソコン・インターネット・ホームページ」という機能面で、「日本語教育の中で何ができるのだろうか」と考えてきた。即ち、パソコンの持つ諸機能を「教育の現場にどう活用したらいいか」という視点である。従って、本稿では、まず、筆者が試みてきたインターネットを使った小さな取り組みを紹介し、次に、筆者が得た初歩的専門知識と技術を試したものとして（依然として分からない事柄が多いが）、現有サイト上の無料ホームページを利用する形で、実験的に作成した「ホームページ」の紹介をする。最後に、日本語教育の観点から、自主制作したホームページの利用可能性について、試行錯誤の段階にあることを予め断りつつ、検討を加えることとする。

2. 「インターネットを利用した教室外活動」への取り組み過程

筆者自身がインターネットを使い始めたのは、職場に設置されたパソコンを使つての履修者名

簿の管理と成績付けを始めた 1999 年頃と記憶している。その当時は、「ウインドウズ 95」や「ウインドウズ 98」などの OS（作動システム）による「タイ語環境」のものであった。それ故、日本語のフォントがない場合、インストールする必要があったが、そのインストールのために、職場のコンピュータ関係のタイ人教員からよく言われたのが「日本語のフォントは大学にないから、どこかで購入する必要がある」というもので、加えて、「日本語のキーボードがないから、日本語を入力することは不可能でしょう」とも言われた時期であった。確かに、機種によって、日本語は読めるが、平仮名に変換できない場合やメニューの「表示」からエンコーディングで日本語を選択しているにもかかわらず、文字化けしてしまうケースなど、いろいろ苦勞もあった。その後、マイクロソフト社から「グローバル IME 5.02」がダウンロードできることを知り、ダウンロード処理をしてからは、先述の問題は解消された。

2001 年にタイで購入したパソコンでは、「ウインドウズ 2000 プロフェッショナル」をインストールして使っていた。もちろん、多言語対応ということで、日本語・タイ語・英語がワードプログラムの中で、同時に打てるなど、教材作りに魅力を感じたものの、不具合の連続で、結局、タイ語環境の「ウインドウズ 98」を再度インストールし、日本語のフォントもインターネット上からダウンロードした。

こうした状況下にあつて、筆者は日本語を履修する学生とインターネットによる「電子メール交換」ができないかを考えてみた。これを実施する理由には、1) 学生に既習の語彙や文法や文型を総合的に使わせることが可能であること、また、既習事項の定着化も図れること、2) 丁寧体の手紙文の練習ができること、3) 手紙形式なので、相手があつてのやりとりを実際に意識（リアル感覚）しながら、メッセージの交換ができること、4) 教師が学習者の語学力に合わせて、個別に対応できる点、5) メールの文書内で、間違いなどの訂正、所謂、フィードバックが即時にできること、6) クラッシュン（S.Krashen）が言う「理解可能な言語インプット $< i + 1 >$ 」に示される「インプット仮説（学習者の現在の力より 1 段階高めのレベルの言語要素を与えることが効果的なインプット）」に基づき、教師が $< i + 1 >$ のインプットを学生に与えることができること、7) 教室内の「会話」は形式的な練習になりがちで、実質的な会話を進めにくい環境がある。つまり、「授業」という枠組みの制限が課され、「私的な会話」を教室内でクラス全員がいる中では発話しにくいという条件である。また、教室外、即ち、授業時間以外に時間を取って全員一人ひとりというのも、どこか自然さに欠ける要素が認められる、8) 電子メールの将来性を展望するならば、電話による会話があるように、メールによる会話的ないしは対話的なやりとりも機会的にも頻度的にも増すだろうという想定、などがあつた。

学生のパソコン所有状況や電話回線による日本語フォントのダウンロードが円滑に行えるか否かを見極めた上で、2002 年度・後期の「JPN433 エアラインビジネスのための日本語」を履修する学生（全部で 12 名）を対象に、プロジェクトとして行った。これは、担当教師と学生による

インターネット上での電子メールの交換を最低週1回義務付け、7週間続け、最終的には全部のやりとりを記録としてプリントアウトさせて、報告書としてまとめ上げ、提出させるプロジェクトである。学生の日本語のレベルは初級前半部分を終了した程度であった。オリエンテーションとして、学生が所有しているパソコンのOS（ウインドウズ95、ウインドウズ98、ウインドウズME等）の種類を確かめた上で、日本語フォントの入手方法とダウンロードの方法、文字化けした場合の処置方法、そして、ローマ字入力による日本語の入力方法（促音、カタカナ表記、助詞の「は」「を」、漢字変換など）などを説明した後、実施した。

学生の反応は概ね良かったという印象であった。何よりも、教師とのメール上のやりとりを楽しんだように見受けられた。ある学生は、教師からの返信を受信すると、すぐに次のメールを送信して、全部で往復13回のやりとりをしていた。一方で、教師からの返事を受信することなく、メールを送信するのみの学生や、教師に質問だけを書いて、送ってくる学生など、困った学生もいたものの、全体的には、伝えたいこと、書きたいことを一生懸命キーボードで打って、メールを送信したのではないかと考えている。

この教室外の時間を活用したインターネットによる「教師・学生間の電子メール交換プロジェクト」は、これが初めての試みであったが、教師にとっても学生にとっても、対面的な会話を進めているような感覚が持てたことが一番の成果であろう。裏返して言えば、教室の授業だけのやりとりだけでは、知り合っている事柄が実に少なく、表面的な人間関係にしか過ぎなかった点である。その意味で、「メールの交換」は、教師と学生の実質的にして良好な対話の人間関係をもたらしたとも言える。更に、教室における受け身的な学習態度に比して、手を使って、集中してメールを打ったという「行為の主体性」が見られたことも指摘できよう。

一方、日本語の言語能力面であるが、個人差はあるものの、教師が学生から送られたメールをよく読んで、送られた内容に基づいて、「何を書かせたいのか」、「どんな話題へ展開したらいいのか」、「どんな話題に持って行けば、書けそうなのか」等を、よく吟味して、学生に返信を出せば、やりとりの内容は発展的になるので、それに合わせて、学生の日本語運用力はやはり確実に高くなっていったのではないかとと思われる。その証左として、メールの文章がプロジェクトを開始した当初の形式的な文面から内容重視の作文的な文章に推移（形式よりも内容への関心移行）したこと、教師からの部分的な添削（毎回一つだけ大きな、且つ重要な間違いを指摘し、直す）によって、同じ間違いが減ってくること、意欲的に既習の文型を使おう、又は自分で辞書を引いて探した語彙を使おうという意欲が見られたこと、が挙げられる。

3. 「ホームページの自主制作」への道程

前節の「電子メール交換」プロジェクトの反応が良好だったのを受けて、筆者は、次第に日本語を履修する学生のために、自作の「ホームページ」を通して、学生の日本語学習にプラスにな

るような方策を考え始めた。

その頃、パソコンのOSも「ウインドウズ XP ホームエディション」が広く使われるようになっていた頃である。これにより、筆者や筆者の周辺では不評だった「ウインドウズ 2000 プロフェッショナル」に代わって、日本語フォントのインストールがOS内で処理でき、数分間で、タイ語環境の中に「日本語環境」がセット・アップできる態勢が整ったのである。

こうしたパソコンのハード環境の変化と相俟って、インターネットを媒介に展開されるウェブ上で、日本語教師が手掛けた数多くのホームページを眼にしてきた。これをきっかけに、日本語教育でのコンピュータ（パソコン）の利用や活用方法について、考えるようになった。依然として、筆者の「パソコン・アレルギー」は続いているものの、職場（大学）からの「圧力」もあった。それは、「E-Learning（電子教育）」への段階的取り組み作業の開始であった。先の「履修者名簿の管理」と「成績判定」に加えて、各科目の「コース概要（Course Outline）」や「授業計画書（Teaching Plan）」のオンライン化など、パソコンとの関わりがより深くなってきた。

ここで、改めて、筆者なりの「日本語教育でのコンピュータ（パソコン）利用及び活用」をまとめてみた。即ち、日本語教育の目標と内容に照らし合わせれば、パソコンの利用及び活用の観点は、1）「情報源（リソース）」という観点、2）「学習ツール」という自律学習の観点、3）「インタラクティブ（interactive）」、即ち、双方向的やりとりを軸とする交流的観点、の三つに絞られると思われる。この三つの観点から、ホームページの作成に挑戦した。正直言って、何の具体的な知識や技術も無く始めた。その第一歩として、2003年7月頃からウェブ上の「無料ホームページ」をいろいろ調べてみた。もちろん、職場である学内のコンピュータ・センターのスタッフと相談しながら、作成することも可能であったが、筆者の知識の皆無やタイ人スタッフとのコミュニケーションの難しさや職場がそれぞれ別の建物に分かれていることによる連絡の取りにくさ、などの理由、また、自らの学習も兼ねて、ウェブサイトから得られる「無料ホームページ」で作る決心をした。いろいろウェブ上で物色している中で、「<http://www.kigaru.com>」の「60秒で無料ホームページ」に飛び付いた。実際には「60秒」という訳にはいかなかったが、同年10月頃を境に少しずつではあるが、授業の合間を見ながら、職場の机上のパソコンで制作作業を始めた。

「試作品（<http://kigaru.gaiax.com/home/sripatum>）」として発信したのは、2004年4月のことであった。

ホームページを作成した一番の大きな理由は、「日本語科のホームページ」を通して、タイ人学生と日本人教員との「日本語交流」を実現化させたかったということである。現段階では、100パーセント満足する形と内容には程遠いものではあるが、実現に向けて、基本的にして可能なところから作ることにしたという点では、「第一歩の実現」と捉えている。

無料のホームページには、上述の三つの観点を考慮して、メニューに、1）プロフィール（作成の目的）、2）先生の記事（学生に読んでもらえるように、初級レベルで書き下ろした日記文）、

3) BBS (電子掲示板)、4) アルバム (日本語科で行われた教室内外の活動を記録撮影した写真集)、5) リンク (日本語学習支援の立場からのウェブサイト・ウェブページの紹介) の五つを柱とした。以下、それぞれの柱について、説明を加えることにする。

3.1 プロフィール

簡単な大学の紹介とこのホームページ作成の目的を簡潔に記した。その目的は、「掲示板」機能を使用して、学生達と日本語でコミュニケーションを図ろうというねらいと学生達の活動を記録として報告 (情報発信) しようというものである。

3.2 先生の日記

学内の日本語を履修する学生を対象に、日本人教員が学生でも読めるように、書き下ろした日記文である。時折、読解用の宿題として再利用したり、定期試験の一部に使用したりしたこともある。

3.3 BBS (Bulletin Board System ; 電子掲示板)

電子掲示板の用途は、いろいろ列举できよう。今までのところ、その機能を十分に使いきっていないのが現状である。これまでのところ、「自己紹介文」を掲示させたり、「ある1日の出来事」を掲示板で発表させたりしている程度である。また、交換留学生として、学術協定を結ぶ日本の大学へ4か月間 (2004年5月ー同年8月) 派遣された学生による「留学レポート (毎週)」の掲載も行った。

今後、BBSの機能を果たすべく、初級レベルにある学生の「意見交換の場」とするには、「タスク活動」の一環として位置付けた上で、教室活動の中で段階的に指導する必要があるだろう。例えば、意見を表明しやすいトピックとして、「クラスで、『日本語で日本語を教える』ことについて、皆さんはどう思いますか」を取り上げ、問題提起用に教師が書き下ろした「読解文」を読み、学生に問題意識を持たせ、意見形成へと膨らませる。意見表明にBBSを活用して、学生各自の意見を掲示させていこうという手法である。しかし、これでは、「意見の掲示」にしか過ぎないので、「交換」の掲示板になるように、「議論」という機能について、学習をする機会が必要となる。タスク形式で進めるのは、「何かをすることによって学ぶ」姿勢を創るとともに、学生が活動に参加しながら、他の学生に働きかけたり、働きかけられたりしながら、学習する態勢を、この双方向的交流機能を有する「BBS」で実現できたらいいと、期待している。

3.4 アルバム

筆者が国際交流基金の「2003年度 在外邦人日本語教師研修 (2003年11月ー12月)」に参加した際に購入したデジタルカメラで記録撮影した写真である。日本語科の教室の内外で行われた様々な日本語に関わる活動を紹介している。このアルバムから、学内の広報紙やニュースレター等に転載された写真もあり、アルバムを作った甲斐があったと感じている。このアルバムでは、学生が関わった活動を中心に写真を載せている。

3.5 リンク

3.5.1 「学習ツール系」・「情報ツール系」・「総合系」

ホームページの制作以前は、ウェブサイトの URL (Uniform Resource Locator) を個別に適宜、学生に紹介していたが、ここでは、作成したホームページの「リンク」に載せたリンク先 (他のウェブページ) を紹介することにする。筆者は、リンク先の種類を、便宜上、1) 学習系、2) 情報 (文化) 系、3) 総合系 (学習系と情報系) の三つに区分して、簡単な説明を加えることにした。尚、「数字とタイトル名」は、ウェブページ上の画面における実際の通し番号とタイトル名を示すものである。分類方法に関しては、今後、学習系については、学生の利便を考慮して、科目別にまとめ直したり、或いは、学習項目別、例えば、漢字、語彙、発音、助詞、活用などに分けたりすることも検討する必要があるかもしれない。

ところで、リンク先の選定基準であるが、基本的に初級レベルで利用価値があり、更に、タイ語による説明があるものを優先し、且つ、使いやすいウェブサイト若しくはウェブページを優先して、載せた。

3.5.2 「学習ツール」系

- 1) 「1. Online Japanese-Practice」 <http://www.nihonmura.net/th>

ひらがな、カタカナ、漢字の練習、動詞の各活用がウェブ上でできる。日本語が打てる環境を必要とする。

- 2) 「4. Reading Tutor」 <http://language.tin.ac.jp/tools.e.html>

「リーディングチュウ太 (チュウ太の道具箱)」で、パソコン画面上の和文テキストであれば、漢字の読み方や意味を教えてくれるツールである。タイ語がないのが残念である。

- 3) 「5. あすなろ」 <http://hinoki.ryu.titech.ac.jp/index-e.php>

一種の辞書で、タイ語での検索も可能である。

- 4) 「6. Japanese Easy Test」 <http://momo.jpf.go.jp/sushi/index.php?LangFlag=t>

初級前半レベル向きで、日本語能力試験 4 級対策の総合的復習が可能である。タイ語での案内がある。

- 5) 「7. English-Thai Thai-English Dictionary」 <http://lexitron.nectec.or.th/#>

日本語の用語になりにくい、日本語訳になじまないものなど、タイ語から日本語への訳が上手いかないとき、英語訳から「カタカナ表記」を考えてもいいかもしれない。

- 6) 「8. Thai-Japanese Japanese-Thai Dictionary」 <http://saikam.nii.ac.jp>

タイ語から日本語への、日本語からタイ語への辞書、そして、漢字の辞書にもなっている。

- 7) 「12. 日本語能力試験の練習問題」 <http://n-lab.kir.jp/library/mondaidb/index.html>

練習問題形式で、多量の問題数は、試験での得点アップに繋がると思われる。1 級から 3 級までがある。

- 8) 「17. 日本語についてのしつもん」 <http://hokutoda.com/>

日本や日本語について、質問があれば、タイ語で投稿できるものであるが、寄せられた質問や回答を読むのも一利ありそうと思われる。タイ人対象のウェブサイトである。

- 9) 「18. かんたんなオンラインゲーム」 <http://hokutoda.com/Game/FlashGame/game.html>

ひらがなとカタカナを習い始めたビギナー向きである。

3.5.3 「情報ツール」系

- 1) 「2. 教養学部のカリキュラム」 http://www.spu.ac.th/Pg_fac/LiberalArt/liberalart.html

筆者が勤務している大学での英語によるカリキュラムの概要である。

- 2) 「3. Japanese font」 <http://www.arts.chula.ac.th/~japan>

パソコンを所有する学生全員の OS が「ウインドウズ XP ホームエディション」ではないので、日本語フォントをダウンロードできるウェブサイトを紹介しておいた。

- 3) 「9. 日本に住みます」 <http://www.clair.or.jp/tagengo>

日本で生活する際のガイドブックである。漢字仮名混じり版、ひらがな版、タイ語版もあるので、教材にも利用できるかもしれない。

- 4) 「10. 日本へ行くビザについて」 <http://embjp-th.org/indexth.htm>

タイ人の日本入国ビザの手続き方法についての在タイ日本大使館のホームページである。学生からのビザの問い合わせが、結構多いという理由による。

- 5) 「11. 日本の古い話」 <http://web-japan.org/kidsworld/folk.html>

英語で書かれているが、絵がかわいいので、載せた。また、学生による「絵本作りプロジェクト」の参考ウェブページにしている。

- 6) 「13. ホームページの漢字を読みます」 <http://www.hiragana.jp/th>

日本語ウェブサイトの URL を入力すると、漢字部分に振り仮名を付けてくれる便利なツールである。時折、漢字のルビの間違いが見受けられるので、注意が必要である。

- 7) 「14. 日本について知ります」 <http://japankiku.com/kiku2004/index.html>

取り敢えず、様々なジャンルに対応できるのではないかと思います。載せた。学生のサブカルチャーに対応するものと思われる。タイ語のウェブサイトである。

- 8) 「15. The Japan Foundation Bangkok」 http://www.jfbkk.or.th/index_th.html

日本語能力試験の案内など、タイで催しされるイベントや行事の案内も掲載されている。タイ語版のウェブページである。

- 9) 「16. わたしのまちーなごや」 <http://www.tsnlife.com/nagoyathaidic/index.html>

筆者の出身が名古屋なので、載せたが、このホームページの運営はタイ人によるもので、タイ語での紹介になっている。

- 10) 「17. 日本語についてのしつもん」 <http://hokutoda.com/>

このウェブサイトの中に、ワード上でのローマ字による日本語入力の方法がタイ語で説明されている。

- 11) 「19. 日本の料理を作りましょう」 <http://www2.newweb.ne.jp/wc/kyanara/ryori.html>

日本に在住するタイ人女性のウェブページで、レシピはタイ語で書かれている。但し、写真がないのが残念である。レシピの問い合わせも、稀にあるので、掲載しておいた。

3.5.4 「総合系」

「学習系」と「情報系」ないしは「文化系」の両方の内容を併せ持っているウェブサイトである。筆者のホームページのリンクには一つのみ該当するものを載せている。現時点では、「17. 日本語についてのしつもん」のみである。

4. ホームページを発信地とする「イーラーニング」への発展

筆者の大学では、近年の「イーラーニング (e-learning)」の潮流を受けて、大学のホームページ (<http://www.spu.ac.th>) に「イーラーニング」がメニュー項目として加えられ、それをクリックすると、「履修科目のウェブページ (<http://komut.spu.ac.th/%7Ecai/course.html>)」に入るという仕組みが既に、全科目ではないが、出来上がりつつある。筆者の所属先である教養学部・外国語学科においても、積極的にこれを推進しようとする状況下にある。この推進の牽引役に当たるものとして、「セルフアクセス・ラーニング・センター (Self-Access Learning Center)」の設置が挙げられる。言わば、これは、一種の「外国語自習室」のようなもので、センター内には、コンピュータ (インターネット可)、一般市販教材、CD-ROM、テープレコーダーと語学用テープ、ビデオ機器と語学用ビデオテープなどが配置されている。特記すべき事項としては、学生には、「ポートフォリオ (自己評価・記録表)」が渡され、学生は各科目の学習内容と進度に合わせた「セルフアクセス・ラーニング用シート (科目別教材プリント)」を使いながら、自主的に課外学習を進め、そして、自主的に学習を管理しなければならない点である。日本語科でも、2003 年度・夏学期から市販教材の一部を教材プリントとして作成し、課外学習用に充てている。

上述の「自主的学習」と「自主的管理」に関連して言えば、「自律的学習」を支援する、教師から学生へのアプローチとも言えよう。これと併行する形で、コンピュータの教育的活用の立場から見ても、「自律的学習」への方向性が窺えよう。事実、CAI (Computer Assisted Instruction) から CAL (Computer Assisted Learning) への転換は、学習ソフト利用による教授法中心的考え方に基づく個別学習から、学習者の自律的学習という視点に基づいて、学習者が学習過程全般の中にあって、主体的にコンピュータを活用していく関わりを模索する姿への変遷とも言える。その姿には、CAMEL (Computer Assisted Multi-purpose Education and Learning)、CELL (Computer Enhanced Language Learning)、CASTEL (Computer Assisted System for Teaching and Learning) などが挙げられよう。

筆者は、「セルフアクセス・ラーニングの自己管理型学習」と「コンピュータによる自律型学習」の二つの機能を融合させる形で、大学のウェブページに「イーラーニング (e-Learning)」として、前出の「課外学習用科目別教材プリント」を載せることにした。このイーラーニングのウェブページに「日本語科目のホームページ (<http://komut.spu.ac.th/~jpn331/>)」を新たに置き、この「日本語科目ホームページ」のメニューのリンクに、試作品である「自作ホームページ」を連繋させることにした。付け加えて、メニューのエキササイズ (Exercises) では、ウェブ問題作成ツール (<http://www.iwai-h.ed.jp/~irie/javascript/webquiz/>) を利用して、科目名「JPN333 日本語Ⅲ」を履修する学生を対象に、「ウェブ問題」を実験的に作成してみた (2004 年度・後期)。

何れにせよ、大学のウェブサイト内に設けられた「日本語科目ホームページ」には、これまでに個々別々に取り組んできたものが、一つの「形」となったが、今後は、「内容と機能」の充実に向けて、改良・改善していきたいと考えている。

5. 今後の課題

「パソコン (コンピュータ) からインターネット」へ、「インターネットからホームページ」へ、そして、「ホームページからイーラーニング」への展開は、「教育・学習」における「教師－学習者」の関係を、インターネットを手段に協同的 (collaboration) 関係に向かわせるものでもあろう。その具体的な手段となるのが、パソコンとインターネットの結合を利用した、「電子メール」或いは「メーリングリスト」、「電子掲示板」、「チャット」などのインターアクション機能であろう。更に「音声、動画、文字、絵」等が加えられるとなると、「マルチメディア」を媒体とする「インタラクティブ」なる、即ち、双方向的交流も現実の課題となるはずである。そして、このインタラクティブには、言語的・視覚的・聴覚的・触覚的な機能が含まれ、期待できる部分が多々あるが、筆者の力量不足の故、少しずつ実現していきたいと考えている。

この「パソコンからイーラーニングへの発展」は、日本語教育を実践する立場から言えば、1) 日本語でコミュニケーションをいつでも、どこからでも行える、2) 日本語で様々な知識が獲得できる、3) 日本の文化に関する知識や理解を自分で深化させることができる、4) 文化の比較ができる、5) インターネットで双方向的交流ができ、その交流の中で日本語を学び続けることができる、諸メリットが指摘できよう。

これらの諸メリットを活かすためには、条件・環境の整備が求められるが、教育的環境からは、コンピュータの普及・定着や機能の高度化に伴って、教員のコンピュータ・リテラシーのみならず学習者のコンピュータ・リテラシーも向上させる情報教育の一層の充実が求められる。また、「日本語科ホームページ (試作品)」を通じて、教室における学習活動を補強する、若しくは、強化するツール (教具) として、パソコンをもっと活用する必要がある。その一例として、筆者は国際交流基金・日本語国際センターの根津誠専任講師がウェブマスターを務める「日本語横丁 (ウ

ウェブサイト)」において、「インターネットを使った活動」を投稿した。尚、この投稿は「2003 年度在外邦人日本語教師研修のグループ課題」であるが、他の先生方の投稿も有益と思われるので、参照されたい (<http://hpcgil.nifty.com/netsuma/wwwforum/>)。更に、教室活動の延長線上には、「電子メール」、「メーリングリスト」、「電子掲示板」、「チャット」等の利用による学習者と教師のインターアクションを推進する戦略も要求されよう。

これと並行して、イーラーニングという枠組みにある「日本語科目のホームページ（大学のウェブページ）」からは、「コースウェア」の開発を進める用意もある。このコースウェアの開発には、学習者の「個別学習」と「自律学習」を軸とする、「学習者中心」の視点が要になるだろう。

このように筆者の課題は、多種多岐に及ぶが、課題の実現に向けて、一歩ずつ「実践」を積んでいきたいと思う。

6. 終わりに一志向・指向・思考・嗜好・私行・施行・至高＝試行錯誤的経験

筆者がタイ国で日本語を教え始めて、13 年目に入り、現在、勤務する大学では、10 年目を迎えた。パソコンを巡る環境は、この期間で見ても大きな変化を遂げたのが筆者の実感である。この変化は、IT（情報通信技術）時代と言われる現在、そして、今後にも亘っても、大きく個人の考え方、生活環境、社会環境、教育環境、文化環境などを変える状況にあることは確実であろう。その意味で、筆者のような日本人がタイ人に日本語を教えることの意義は、様々な媒体を通しての日本語でのコミュニケーションの可能性と機会を追求する中に在って、日本人教員とタイ人学生との日本語によるコミュニケーションやインターアクションを通じて、物の捉え方や考え方、文化の比較、そして、理解と相違を、日本人教員とタイ人学生の双方が「直接体験できる場」を生み出し、且つ、共有できるようにすることにあると言えるのではないだろうか。

最後に、「パソコン→インターネット→ホームページ→イーラーニング」への一連の取り組みのプロセスは、文字通り、筆者にとっては、『シコウ』という同音異義語の中での過程」でもあった。この「シコウ過程」の中で、いろいろな方がたの助力を頂いた。殊に、同じ職場のパソコン世代の高橋亜紀専任講師には、ホームページ作成の技術面で強力なサポートを頂いた。また、本稿の執筆に際しては、資料収集の面で、富満政樹非常勤講師にも協力を頂いた。紙面を借りて、感謝の意を申し上げたい。

参考文献

- 青木直子・尾崎明人・土岐哲（2001）『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社、136－157、180－197
- 大坪一夫（1992）「日本語教育でのコンピュータ利用の過去、現在と未来」、『日本語教育』78 号、9－19

『月刊日本語』1月号、2003年、アルク、10-31

田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際－学習支援システムの開発－』、大修館書店、125-138

独立行政法人 国立国語研究所（2003）『平成13年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 タイ（バンコック）アンケート調査集計結果報告書』、6-93

中島和子（1993）「パソコン通信を活用した日本語教育－『書く力』を中心に－」、『日本語学』12月号、Vol. 12、22-30

橋本良明（1998）「情報機器の利用と情報行動－コミュニケーション環境の変化－」、『日本語学』9月臨時増刊号』、Vol. 17、130-139

畑佐一味（1991）「日本語教育におけるコンピュータ利用－米国からの一考察－」、『日本語教育』74号、162-171

深田淳（1992）「日本語教育におけるCAIの位置づけおよび役割」、『日本語教育』78号、42-53

参考ウェブサイト及びウェブページ（2005年2月現在時点）

<http://202.245.103.49/kenshu/Goi/CALL.html>

<http://www.nihongoweb.com/index.html>

「日本語教育に於けるインターネットの活用」

<http://kite.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/7/jung.pdf>

鄭起「日本語教育におけるマルチメディア活用の有効性の役割」

<http://www.geocities.jp/yassan0518/computer/computer-j.html>

「コンピューターと日本語教育」

<http://www.geocities.jp/yassan0518/computer/computer-j2.html>

「語学教育でのコンピューターの利用」

<http://homepage1.nifty.com/netsuma/workshop/comp/comp1.html>

<http://www.sla.purdue.edu/academic/fll/JapanProj/NihongoRensai/>

畑佐一味「第1回 とにかくコンピュータをつかってみよう」

<http://tell.fill.purdue.edu/hatasa/kurosio/selftest-j.html>

畑佐一味「日本語教師のためにオンラインIT講座用 ITリテラシー自己診断テスト」

<http://dasan.sejong.ac.kr/~morishin>

森山新「韓国における日本語教育とコンピューター利用」

<http://kigaru.gaiax.com/home/sripatum>

<http://homepage1.nifty.com/netsuma/workshop/comp/>

根津誠「日本語教育とコンピュータ」

<http://202.245.103.49/computer/beginner.htm>

「これから日本語教育にコンピュータ・インターネットを駆使しようとする方へ」

<http://www.jiten.com/dicmi/docs/>

「マルチメディア／インターネット事典」

<http://www.j-ns.com/freehomepage>

「誰でも解る無料ホームページ作成講座」

<http://www.kigaru.com>

「きがるコム」